

【体育科教科提案】

新たな発見のある体育の学び

—「できる」「わかる」「かかわる」から体育科の『学び』を考える—

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

体育の授業においては、「上手・下手」あるいは「できる・できない」が目に見えやすいため、どうしても「できなければ楽しくない」というようになりがちである。しかし、「苦手」「できない」といった状況のままでは体育を学ぶ意味が見出せない。新しい単元や各領域の運動・スポーツを行う上で、子どもたちの適時性やこれまでの経験を考慮に入れて、必要と思われる知識や技能を保証すること。また、自分自身の身体についての知識や健康で快適な生活を営むための知識を育てていくことが重要だろう。

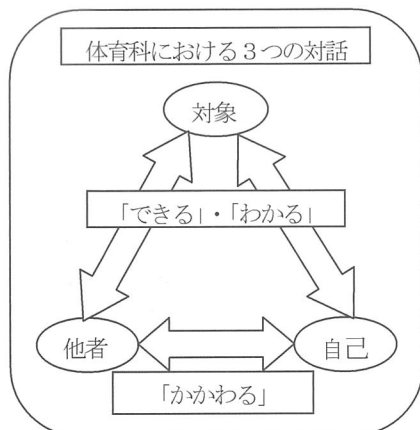
そこで、「対象である教材（各領域の運動・スポーツ）に夢中で取り組む姿（対象との対話）」「共に学ぶ仲間とかかわる姿（他者との対話）」「以前と比べて技能や認識が高まっている姿（自己との対話）」の3つの姿を大切にしたい。体育科では、この三位一体の活動が機能することで、「学びの質の高まり」が見られるものと考えている。

(2) 体育科でめざす子ども像

本校の子どもたちの実態を見てみると、ほとんどの子どもは体を動かすことが大好きで、スポレク附属（運動会）やおくやま祭りでのダンスには意欲的に取り組む傾向にある。しかし、休み時間に積極的に外に出てボール遊びや鬼ごっこ等で遊ぼうとする子どもがいる一方、体を動かすことや外で遊ぶことに消極的な子どもも少なからず見られる。また、通学エリアが和歌山市内全域およびその周辺と広域なことから、電車やバスで通学する子どもが多い。放課後にスポーツを習っている子どもはまだしも、そうでない子どもの運動量が確保されにくい状況にもある。また、得意なスポーツには積極的に取り組むが、苦手なものに対してはすぐにあきらめたり、積極的にかかわろうとしなかったりということも見られる。

子どもが運動やスポーツと向き合って、できなかったことを克服したり以前よりも上手くなったと実感できたりするとき、以前よりも向上した喜びを味わうことができる。また、自分や仲間の身体について理解することは、新たな人間認識へと結びつくだろう。本校の体育科においては、そういった「仲間と共に運動やスポーツ、身体のことにかかわり、そのおもしろさや自分自身と仲間の可能性を新たに発見することのできる子ども」を育てたいと考えている。

2. 体育科学習における「学びの質の高まり」



本年度の学校提案は、昨年度同様『学びの質の高まりをめざして』であり、「学び」とは、対象・他者・自己と対話することで成熟していく三位一体の活動であると捉えている。それぞれの対話は、独立したものではなく、他の対話も意識しながら進めるものである。そして、「学びの質の高まり」とは、対象・他者・自己への認識を更新することで生まれると考えている。

そこで、体育科学習における三つの対話を次のように考えた。
「対象との対話」…「次もやってみたい」「もっと上手になりたい」
という意欲・欲求

「他者との対話」…一緒に挑戦する仲間の姿を応援したり、どうすれば上手くなるのかをお互いで見合ったり・教え合ったりする姿

「自己との対話」…「次はどんなことに挑戦しようかな」「どうすれば上手くいくのかな」という思い
体育科では、これらの対話が体育の授業の中で多く行われ、より内容の高い対話へと更新されていくことを「学びの質の高まり」と捉えたい。

そこで、次の二つのことを中心に研究を進めていく。

一つ目は、対象である学習内容の研究である。子どもの適時性やこれまでの経験を考慮に入れて、子ども達が「今もっている力」で楽しみながら対象と対話したり、他者（仲間）とかかわったり、自己と向き合ったりできる対象との出会わせ方を大切にしたい。

二つ目は、「できる」「わかる」「かかわる」の三つの視点への手立てである。「できる」とは「各領域の運動・スポーツを楽しむ（表現・競争・克服・達成）ための基礎的な技能の習得」であり、「わかる」とは「できるようになるための筋道・方法（コツ）」や「各領域の運動の特性」などの理解、保健領域での「健康な生活のための知識」の理解である。そして、「かかわる」とは「自分と他者（仲間）の関係」や「上手くなるためのコツを媒介に見合い・教え合う関係」、「みんなが楽しめるためのルールづくり」などだと考えている。単元を進める中で、この三つの視点で子どもを見て、適切な支援をしていくことが重要だと考えている。

3. 研究の展望

新学習指導要領で問われている基礎基本の習得学習と自発的な活用・探求学習とがバランスよく調和させたものになるように、子どもたちに身に付けさせたい具体的な内容をより明確にし、指導内容の定着を図るために、体育科カリキュラムの検討をしていく。

また、子ども達が意欲的に「やってみよう」と感じられるような対象との出会わせ方のために、以下のようなことを大切に、新たな発見のある体育の学びをめざしたい。

- 意欲的に取り組むための「場づくり」の工夫
- 「できる」「わかる」ための支援の工夫
- 学びを高め合うための「かかわる」が生かせるグループづくり
- 子どもの高まりが客観的に見える手立て（学習カード）の研究

そして、対象・他者・自己のそれぞれの認識の更新のために、「みとりと支援」を大切にしたい。「教師がわかろうとし、子どももわかろうとする。そこで、一緒に、共同作業として、もっともっとわかるためにはどうすればいいかを考える。」と佐伯胖が言うように¹⁾、教師自身の教材・子どもへの新しい認識が、子ども一人ひとりの新たな自己認識へとつながる。教師にとっても、子どもにとっても学ぶ意味のある体育授業をめざしたい。

4. 研究の評価

子どもたちに身に付けさせたい具体的な内容をより明確にし、指導内容の定着を図ることができるような系統立った体育科カリキュラムとなっているか。また、授業者の主観のみで語るのではなく、結果を裏付けるようなデータ（子どものアンケートや学習カード、デジカメやビデオでの子どもの活動記録など）を用いたり、授業者以外の観察（参観）者の眼を取り入れたりすることで、成果と課題やまとめについての客観性を高められたか。対象への出会わせ方を大切に「場づくり」や「できる」「わかる」「かかわる」ための適切な支援が行えたかなどで研究の評価を行っていきたい。

参考文献

- 1) 佐伯 胖（2003）『「わかる」ということの意味』岩波書店